

オリンピック選手村でアルバイト

秦 昭彦 S43 商

当時私は、観光事業研究会の一年生部員でした。現在は代々木公園となっている場所にオリンピック選手村がありましたが、そこには二つの食堂「富士食堂」と「桜食堂」があり、食堂のウェイター・ウェイトレスには東京近郊にある大学の観光事業研究会の部員がアルバイトとして動員されました。慶応大学はアジア・アフリカ料理を提供する「富士食堂」を担当、そこで私は10日程働きました。

食堂はカフェテリア方式で、私たちは、コーヒー・紅茶淹れ、果物として梨とリンゴの陳列、テーブルや床の掃除、食器洗い等々に従事しました。

梨とリンゴは皮を剥かず丸ごと提供しましたが、それを沢山持ち帰ろうとする貧しい国からと思われる選手がときどき見られました。

マラソンランナーのアベベも毎日富士食堂にきましたが、頭を上下させながら大股・速足で静かに歩いていたのを覚えています。無口で、まさに「走る哲学者」という印象でした。彼は、盲腸の手術から一か月後の来日なので、私は彼のマラソン二連覇はないと思っていたのですが、一位でゴールした直後に余裕をもって柔軟体操を始めた彼の姿をテレビで見たときには「あんな偉大なランナーを身近で見ることができたのだ」と思わず喜びが湧きました。

休憩時間には、私たちは選手達と同じ料理が食べ放題でした。選手の食事は「一日三食で6,000カロリー、コストは2,160円」が基本でしたが、今の物価では20,000円程度になるかと思います。選手村内では、当時としては高級飲料で一ビン50円程度するコカ・コーラが無料で飲み放題、コカ・コーラ社が大会スポンサーになっていたためですが、アメリカ企業の裕福さを思い知らされました。期間中に私はコカ・コーラを一日に4～5本飲んでいました。

アルバイトのウェイター・ウェイトレスにも選手村入場用のパスが支給されるので、仕事がない日でも選手村に入り、陸上競技の練習用400メートルトラックで走っている選手を見ることができました。私は、高校時代は陸上競技部員で中距離走者でしたので、そんなときは選手の走りっぷりを飽かずに見ていました。



選手村での貴重な体験は一生忘れることができないと思います。写真はウェイターをしていたとに胸に付けていたプレートですが、今となっては小生の宝物です。